

高山彦九郎 置文 解読文

奉<sup>二</sup>一通<sup>一</sup>候、拙者京学<sup>二</sup>罷出候、此義  
申上度奉<sup>レ</sup>存候得共、却而御留可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成と  
奉<sup>レ</sup>存、竊罷出候、京都<sup>二</sup>知人御座候而

此人の方へ罷越可<sup>レ</sup>申と奉<sup>レ</sup>存候  
必々御案事被<sup>二</sup>成下<sup>一</sup>間敷候

一 対力は学者之法<sup>二</sup>御座候得ば、一通<sup>三</sup>言上  
仕、大小頂戴仕度奉<sup>レ</sup>存候得共、此義

申上候は罷出<sup>三</sup>事御留被<sup>レ</sup>下と存

竊<sup>レ</sup>藏中之御宝備前兼光之刀、

菊一文字之脇差取出し対力(帯刀)仕罷出候、

何卒此御宝拙者<sup>二</sup>餞別と思可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下

拙者学文(問)二四年も仕、

罷帰可<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>拜<sup>二</sup>慈顔<sup>一</sup>候

謹言

彦九郎

三月今夜

祖父様<sup>江</sup>

一通奉り候、拙者京学に罷り出で候、此義

申上度存じ奉り候得共、却って御留め成らる

べくと存じ奉り、竊に罷り出で候、京都に知

人御座候て、此人の方へ罷り越し申すべく存

じ奉り候

必々御案事成し下さる間敷候

一 帯刀は学者の法に御座候得は、一通り言上

仕り大小頂戴仕り度く存じ奉り候得共、此義

申上候は、罷り出る事留め下さるべくと存じ

竊かに蔵の中の御宝備前兼光の刀、菊一文字

の脇差取出し、帯刀仕り罷り出で候

何卒此の御宝、拙者に餞別と思し召し下さる

べし

拙者学問、二四年も仕り

罷りの帰りの慈候を拜し奉るべく候

謹言

彦九郎

(宝暦十四年)

三月今夜

祖父様へ

高山彦九郎

延享四年(一七四七)、上州新田郡細谷村  
の郷土高山家の次男として生まれ、幼時に  
は伊勢崎の松井晩翠の塾で学び、叔父の影  
響で陽明学、吉川神道の影響を受けて成長  
した。

尊王討幕運動の先駆者として知られ、  
林子平・蒲生君平と共に寛政の三奇人と呼  
ばれる。

農民でありながら、先祖は新田氏につなが  
るという出自の認識を契機に学問を志し、  
宝暦十四年(一七六四)、家出し、京都で  
著名な学者を訪問して教えを受け、諸国を  
遍歴しながら、公家、蘭学者など著名士と  
交わった。

しかしその行動は幕府の嫌忌するところと  
なり、寛政五年(一七九三)、久留米で  
自刃。

京学：京都で学問をすること

案事：心配

候は：そのうちは二そのうらわば

大小：打刀と脇差

備前兼光：備前長船の刀工

菊一文字：刀剣の名、刀茎に十六葉の菊紋を

刻す

何卒：どうか、ぜひ